

「成長させてくださる神」 (1コリ3:1-9)

挽地茂男

2019.2.17 日本基督教団千歳丘教会

パウロという人は、イスラエルの国内で生まれた人ではなく、外地で生まれたユダヤ人です。このようにイスラエルの外地で生まれたり、外地に移住したユダヤ人を〈ディアスポラ〉のユダヤ人というます。



ラ・トゥール「パウロ」

意味は「離散(者)」

という意味ですが、外地でかなりの成功を収めていたユダヤ人もおりました。パウロはローマ市民権を持っておりましたから、比較的成功的ユダヤ人家庭に生まれ育った、ディアスポラの三世くらいの人と推定されています。使徒言行録の記録によりますと、彼は、若い日にイスラエルにユダヤ教の神髄を学ぶために、外地から内地イスラエルへ、ガマリエルという有名な学者(碩学)の許で学ぶために逆留学しております。

小アジア(現在のトルコ地方)のタルソスが彼の生まれ故郷でありまして、ここは、ヘレニズム文化(ア

レクサンドロスの遠征によって地中海世界に一般化したギリシア文化)の栄えた都市であります。ですから、パウロを専門的に勉強するときには、パウロに見られるヘブライズム(ユダヤ的要素)とヘレニズム(ギリシア的要素)の両方をおさえて学ぶ必要が出てまいります。そのギリシア的要素の中で、パウロの考え方に大きく影響を与えているのが「霊肉二元論」と呼ばれるギリシア的な〔現在では「ユダヤ的」と呼ぶ人さえいるのですが〕基本的な発想法です。この霊肉二元論については、クリ



スマスのアドベントの説教の中で、ヨハネによる福音書のキリストの受肉との関係でお話を致しました〔2018.12.30「肉となれる神」ヨハネ1:14-18〕。でも少し復習をしておきたいと思います。

霊肉二元論というのは、人間が「靈魂」と「肉体」〔わたしたちだって健全な精神は、健全な肉体に宿るなどと「精神」と「肉体」と分けて考えます〕からできていると考えます。そして、肉体がマイナスなもの(否定的なもの)劣ったもの(劣位にあるもの)と考

えられます。例えば、人間の靈魂は「清く生きたい」とか、「正しく生きたい」とか、「美しい人生



をおくりたい」
と思ったり決心
をしたりしても、
肉体に生きている
限りは、そんな
決心や理想は

しばらくすれば元も子もなくなっ
てします。いくら決心を繰り返して
も、挫折を繰り返す。そういう
人間のあり様をさして、「**肉体は
靈魂の牢獄である**」〔プラトンの
『パイドン』(82E)にでてくる言
葉〕と言ったりします。人間が肉
体に生きている限りは、脱しきれ
ない「人間の二元的構造」(人間
の二重性)をさしています。そう
すると、「魂が肉体から解放され
る」(靈魂の肉体からの解放)と
いう形で宗教の究極目標(救い)が
語られることになります。例えば、
パウロは「古き人間に死んで、新
しき人間に生まれ変わる」と言っ
たり、「肉の人に死んで、靈の人に
生まれ変わる」(ロマ6:1-11,
ガラ2:20, 5:24-25)と言ったり
します。パウロが人間を語るとき
には、この発想法が頻繁に出てき

ます。

例えばローマ書の有名な箇所
パウロはこうっています。ロマ
書7章(15節~[8章1節])。
中略を入れてお読みします。

「¹⁵わたしは自分のしていること
が、わからない。なぜなら、わた
しは自分の欲する事は行わず、か
えて自分の憎む事をしているか
らである。……²²すなわち、わた
しは、内なる人として〔魂におい
ては〕は神の律法(νόμος)を喜ん
でいるが、²³わたしの肉体〔五体
ἐν τοῖς μέλεσίν μου〕には別の法則
(νόμος)があって、わたしの心の
法則に対して戦いをいどみ、そし
て、肉体〔五体〕に存在する罪の
法則の中に、わたしをとりこにし
ているのを見る。²⁴わたしは、なん
というみじめな人間なのだろう。
だれがこの〈**死のからだ**〉から、
わたしを救ってくれるだろうか。
パウロは自分の体が自分の思い通
りにはならないので、〈**死のから
だ**〉と呼ぶのです。実は〈**死のか
らだ**〉というの

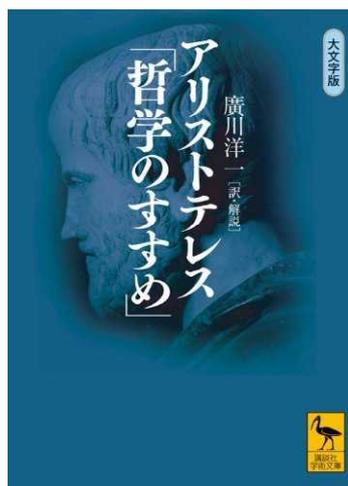


アリストテレス

アリストテレスの『哲学の勧め』〔プ

ロトレプティコス／散逸作品。現在ではイアンブリコスによって保存された資料が加わって、ほぼ復元に近い状態になっていると言われる。廣川洋一訳『哲学のすすめ』講談社学術文庫、2011年、13頁〕。

「……昔、エトルリアの盜賊ども



の手に陥ちた人々は、その身体を生きながら屍体と、両方の身体の各部分が相互にできるだけぴったりと対応するように、向かい合わせて縛り付けられるという念の

入った残忍な方法で殺されたのであるが、われわれ人間はこの人達と同じ劫罰に処せられているのである。すなわち、ちょうど、生きている人々が屍体と結びあわされているのと同じように、われわれの靈魂もまた肉体と結びあわされているのである」(断片10b[2] Ross, 宮内清訳 [=55] / 廣川訳50-51)。

ローマでもこの処刑法が用いられ

ていた、と言われていています。処刑される人は、ほとんど精神をやられて、発狂するように死んでいくと言われていています。もしこの情報をパウロの言葉に持ち込むことが許されるならば、パウロは絶叫しています。「だれがこの〈死のからだ〉から、わたしを救ってくれるだろうか。」

この聖書の箇所を取り上げて宗教学の授業をしておりました時に、授業が終わりますと、一人の女子学生が、教卓の前に泣きながらやってまいりました。何か悪いことでも言ったのかな、と思いつつ「どうしたの」と聞きますと、まだ泣きながら「私この通りなんです」この聖書の言葉通りなんだとおっしゃるんです。「クリスチャンの方ですか」と聞きますと、「いいえ」と答えが返ってきます。「でも教会に行ったり、聖書を読んだりしたことがあるんでしょ」と聞きますと、また「いいえ」と答えが返ってきます。まさか、と思っておりますと、「私結婚できるでしょうか」と尋ねます。「えっ」〔そんなことは分からない〕と思いつつ聞いていますと、好きな人がいるけど、こんな自分が結婚できる

のだろうかと思ってしまう、と言うのです。それからしばらく話をしたのですが、そんな娘さんが今時いるのだと、驚いたことがあります。そんなわけで、それ以後プリントには、そのロマ書の続きを入れるようにしました。7章25節以下。

²⁵ わたしたちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝いたします。このように、わたし自身は心では神の律法に仕えています、肉では罪の法則に仕えているのです。^{8:1} こういうわけで、今や、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」〔※律法・法則 = νόμος〕

これはパウロがキリスト教に回心する前のことをさしていると思われるでしょう。違うのです。入信後の言葉であることは、文脈から明らかです。人間が肉体をもって生きる限りは、私たちはこのような自己分裂や内面的葛藤を経験せ



ざるをえないのです。いやしくも理想をもつと必ず経験します。パウロもそうです。かのマルチン・ルターもそうだっ

たのです。しかし、聖書はその救いを備えているのです。それをパウロもルターも発見したのです。いつでも、どこからでも立ち直れるのです。

さて今日の聖書箇所です。ここには比較的穏やかな形で霊肉二元論が使われています。霊の人と肉の人が出てきます。1節。「3:1 兄弟たち、わたしはあなたがたには、霊の人に対するように語る事ができず、肉の人、つまり、キリストとの関係では乳飲み子である人々に対するように語りました。」

霊の人（πνευματικός）という表現で使われる「（御）霊の、霊的な」という形容詞（πνευματικός）は新約聖書に26回出てくるのですが、その内24回がパウロ書簡に出てきます。パウロに特徴的な用語、パウロ的用語だということが分かります。そして「霊の人」という（名詞化した）使い方は4箇所にはしかありません。一つめは(1)第1コリント2章15節です。

「**霊**の人は一切を判断しますが、その人自身はだれからも判断されたり**し**ません。」霊の人の判断力の卓越性を言います。第二が今日の(2)第1コリント3章1節。「兄

弟たち、わたしはあなたがたには、**霊の人**に対するように語ることができず、肉の人、つまり、キリストとの関係では乳飲み子である人々に対するように語りました。」
霊の人が「乳飲み子」に留まるのではなく、成長する人なのです。
第三は(3)第1コリント14章37節。「**自分は預言する者であるとか、霊の人であると思っている者がい**れば、わたしがここに書いてきたことは**主の命令であると認めなさい**。」
霊の人の主の命令を理解する力の持ち主であることを指摘します。
第四は(4)ガラテヤ書6章1節。「兄弟たち、万一だれかが不注意にも何かの罪に陥ったなら、**霊の人である**〔【新共同訳】“**霊**”に導かれて生きている〕あなたがたは、柔和な心をもって、そういう人を柔和な心で正しい道に立ち帰らせなさい。あなた自身も誘惑されないように、自分に気をつけなさい。」
霊の人の品性と指導力を言います。パウロは「**霊の働き**」「**聖霊の働き**」を重視しました。教会はキリストの体と表現されます。「一」つの体(body)です。そしてその体には神のスピリット(Spirit, 霊、精神)が宿

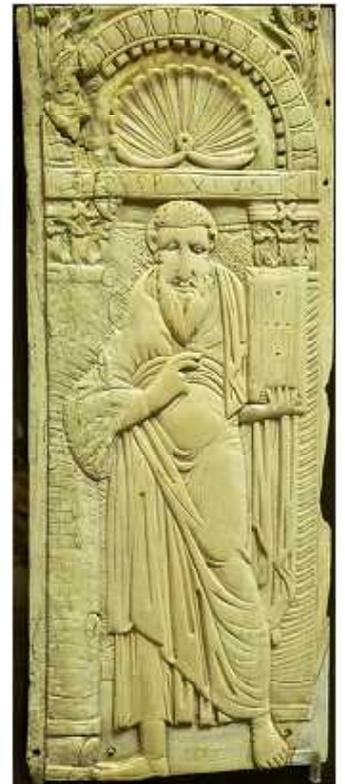
っているのです。教会とは神の霊〔神の心を心とし、霊が与える力〕によって働く「運動体」として存在するのです。**教会は神の召しにより一つに集められ、神の霊に生かされるキリスト者の群れ、「キリストの体」**なのです。

今読みました3章1節に続いて、肉の人に関する記述が出てきます。2-4節。

3:2 わたしはあなたがたに乳を飲ませて、固い食物は与えませんでした。まだ固い物を口にすることができなかったからです。いや、

今でもできません。3:3 相変わらず肉の人だからです。お互いの間にねたみや争いが絶えない以上、あなたがたは肉の人であり、ただの人として歩んでいる、ということになりはしませんか。3:4 ある人が「わたしは

パウロにつく」と言い、他の人が「わたしはアポ



上 : Saint Paul, Byzantine ivory relief, 6th - early 7th century (Musée de Cluny)

口に」などと言っているとすれば、あなたがたは、ただの人にはすぎないではありませんか。

1 節で「キリストとの関係では乳飲み子である」(ὡς σαρκίνοις, ὡς νηπίοις ἐν Χριστῷ) と言われていた内容が、この二節からは具体的に語られています。「乳飲み子」は乳しか飲めず、「まだ固い物を口にすることができ」ません。信仰について初歩的なことしか語れなかった、とパウロは言うのです。そして「いや、今でもできません」〔固い物を口にすることができない〕と付け加えます。いつまで経ってもお乳しか飲まない子どもは、親の心配をかき立てます。離乳食の時期はとっくに過ぎているのに、ミルクしか飲まない。親の内には、子どもの成長に対する不安が拡大していきます。パウロの「まだ固い物を口にすることができなかつた」のです。「いや、今でもできません」「相変わらず肉の人だからです。」という言葉に、コリント教会に対する揶揄や嫌みというよりも、パウロの悲しみがにじんでいます。

具体的にコリント教会に何があつたのかは、3 節後半。「お互い

の間にねたみや争いが絶えない」と言われています。ねたみも争いもキリストの与える平和によって解消されているべき事柄です。「お互いの間にねたみや争いが絶えない以上、あなたがたは肉の人であり、ただの人として歩んでいる、ということになりはしませんか」(v. 3bc)。その通りなのです。

そして、そんな自分に、内面的葛藤さえ覚えなない。正に肉の人なのです。さらにパウロは、ねたみや争いが組織化し、分派にまで発展していることを批判します。「ある人は(が)「わたしはパウロにつく」と言い、他の人は(が)「わたしはアポロに」などと言っている」のです。肉の人の特徴は「人間を誇る」ということです。「人間を誇る」ということは、(自分と)ある人間との間にある特別な関係や縁故が、祝福の源だと考えるのです(3 章 2 1 - 2 3 節)。

コリント第一の手紙の 1 章を読みますと、コリントの教会に分裂があつたことがわかります。1 章 1 2 - 1 3 節



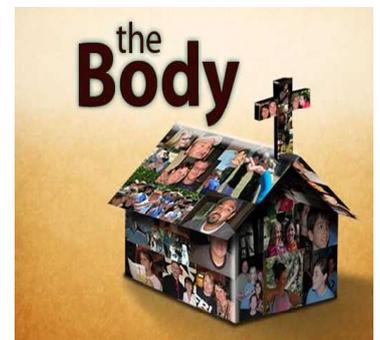
1:12 あなたがたはめいめい、「わ

たしはパウロにつく」「わたしはアポロに」「わたしはケファに」「わたしはキリストに」などと言いつつ合っているとのこと。1:13 キリストは幾つにも分けられてしまったのですか。パウロがあなたのために十字架につけられたのですか。あなたがたはパウロの名によって洗礼を受けたのですか。特定の先生（パウロやアポロやケファ）との縁故関係から、特別の祝福をいただくと、コリントの人々は考え始めていたのです。「ある人が「わたしはパウロにつく」と言い、他の人が「わたしはアポロに」などと言っている」とすれば、あなたがたは、ただの人にすぎないではありませんか」(v. 4)。「ただの人」なのです。人しか見えない。人を通して神を見ない。これが肉の人の特徴なのです。

しかしパウロは嫌みを言って相手をへこまそうとしているのではないのです。コリントの人々を神さまの祝福に導こうとしているのです。肉の人であっても成長することを信じているのです。また成長を求めているのです。つまり教会とは成長するキリストの体なのです。キリスト者が成長すること、

それは同時に教会が成長することを意味します。パウロが思い描いた教会の姿は、第1コリント書の12章（1コリ12:12-31）で描かれます。それによりますと教会は、一つの原理と、四つの認識と、人的組織によって成長していきます。

教会は、「一」と「多」の（教会的）原理を特徴とします。教会は様々な賜物に満ちています。パウロはそれを体に例えて語りました。「**体は一つでも、多くの部分から成っている**」(v. 12, 14)と語ります。つまり体は一つでも多くの部分から成る、「一即多、多即一」という特徴を持ち、多くの部分が有機的に統合されて一つの体が形成される



のです。教会とは、人間の身体と同じように多くの部分が一つに統合された「キリストの体」なのです。そして、この多様性は、いろいろな才能や賜物を持った人がいていろいろな働きをするという、機能的な〔働きの〕多様性のみではありません。この多様性には人種的・社会層的多様性〔つまり性

こらない」のは体の「各部分が互いに配慮し合」っているからだと言います(12:25)。特に(a)負(マイナス)の評価を受ける〔ほかより弱く見える、恰好が悪いと思われる、見苦しい、見劣りのする〕部分への配慮が大切であり(12:23)、(b)神は、見劣りのする部分をいっそう引き立たせて、体を組み立てられました。(12:24)と神の配慮を語ります。

そして第4に(4)お互いが分かちがたく結びついている(相互の



有機的結合〔one for all, all for one デュマの『三銃士』から取られた言葉〕という認識です。第1コリント12章26-27節。

12:26 一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです。12:27 あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。

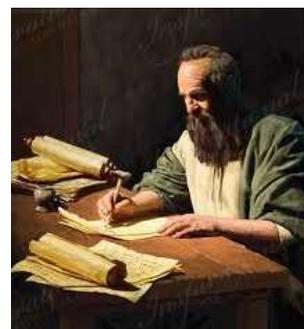
そしてこれらの人々が、人間のつくる適切な人的組織として建て上げられていくのが教会なのです。

それでは、コリントの人々の分

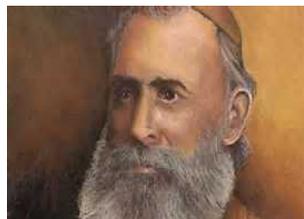
派の種となっているパウロやアポロとはどのような存在なのでしょう。パウロが問いかけます。5節前半。「3:5ab アポロとは何者か。また、パウロとは何者か。…」

パウロはコリント教会の創設者です。アポロはその教会の発展に寄与した人でありました。アポロは—聖書では6箇所でてきますが、それらを総合すると—(1) **アレクサンドリア生まれのユダヤ人**キリスト教徒で、(2) **聖書〔旧約聖書〕に詳しく、聖書に基づいて、イエスがキリスト(メシア)であると公然と立証し**(使徒18:24, 28)、(3) **雄弁家**であり、(4)エフェソとコリント(アカイア州の州都)でめざましい活動を行った人だということが分かります。

〔アポロについてはまた別の機会に学びます。〕パウロもアポロも、どちらもコリント教会にはなくてはならない人でした。パウロ



執筆中のパウロ

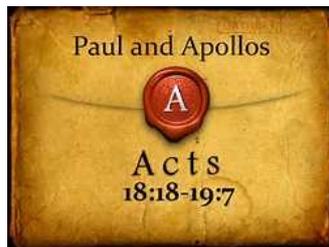


アポロ

はこう表現します。「わたしは植え、アポロは水を注いだ」(v. 6a)。つまり「この二人は」—パウロの言

葉を借りれば、5節後半——「あなたがたを信仰に導くためにそれぞれ主がお与えになった分に応じて仕えた者」(v.5c)なのです。ですから「わたしはパウロにつく」「わたしはアポロに」などとと云わずに、自分たちを通して神を見るように、とパウロは、強い言葉で語るのです。6－7節。

3:6 わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です。3:7 ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。



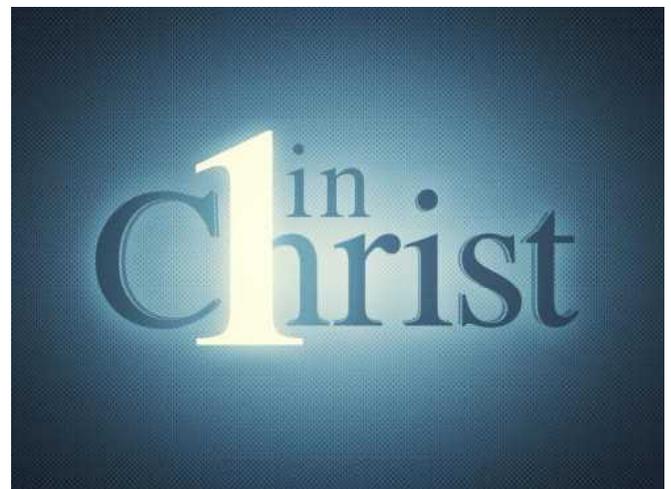
そしてパウロは最後にこのようにまとめます。8－9節。

3:8 植える者と水を注ぐ者とは一つですが、それぞれが働きに応じて自分の報酬を受け取るようになります。3:9 わたしたちは神のために力を合わせて働く者であり、あなたがたは神の畑、神の建物なのです。

教会を構成する人々の働きの種類は違っていますが、それらは皆、一つの目的に向かっています。それは神の畑を耕し、神の建物を建てることなのです、教会は、神の

畑であり、神の建物です。牧師が教会を建てるのではありません。神がお建てになるのです。そのために神は人をお用いになるのです。「牧師とは何者なのでしょうか。」また「信徒とは何者なのでしょうか。」この問いに対する答は一つです。教会に遣わされ集められた人々は、牧師であれ信徒であれ、その働きに違いはあれども、「神の畑を耕し、神の建物を建てるために」等しく「神のために力を合わせて働く者」たちなのです。新しい一週間も、この世界で神さまが、今も、働いておられることを憶えつつ、歩んでまいりましょう。祈りましょう。

2019.2.17 日本基督教団千歳丘教会



3:1 兄弟たち、わたしはあなたがたには、霊の人に対するように語ることができず、肉の人、つまり、キリストとの関係では乳飲み子である人々に対するように語りました。

3:2 わたしはあなたがたに乳を飲ませて、固い食物は与えませんでした。まだ固い物を口にすることができなかつたからです。いや、今でもできません。

3:3 相変わらず肉の人だからです。お互いの間にねたみや争いが絶えない以上、あなたがたは肉の人であり、ただの人として歩んでいる、ということになりはしませんか。

3:4 ある人が「わたしはパウロにつく」と言い、他の人が「わたしはアポロに」などと言っているとすれば、あなたがたは、ただの人にすぎないではありませんか。

3:5 アポロとは何者か。また、パウロとは何者か。この二人は、あなたがたを信仰に導くためにそれぞれ主がお与えになった分に応じて仕えた者です。

3:6 わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくだ

さつたのは神です。

3:7 ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。

3:8 植える者と水を注ぐ者とは一つですが、それぞれが働きに応じて自分の報酬を受け取るようになります。

3:9 わたしたちは神のために力を合わせて働く者であり、あなたがたは神の畑、神の建物なのです。

^{3:1} Καγώ, ἀδελφοί, οὐκ ἠδυνήθην
λαλῆσαι ὑμῖν ὡς πνευματικοῖς ἀλλ' ὡς
σαρκίνοις, ὡς νηπίοις ἐν Χριστῷ.

² γάλα ὑμᾶς ἐπότισα, οὐ βρῶμα· οὕτω
γὰρ ἐδύνασθε. ἀλλ' οὐδὲ ἔτι νῦν
δύνασθε,

³ ἔτι γὰρ σαρκικοί ἐστε. ὅπου γὰρ ἐν
ὑμῖν ζῆλος καὶ ἔρις, οὐχὶ σαρκικοί
ἐστε καὶ κατὰ ἄνθρωπον περιπατεῖτε;

⁴ ὅταν γὰρ λέγη τις· ἐγὼ μὲν εἰμι
Παύλου, ἕτερος δέ· ἐγὼ Ἀπολλῶ, οὐκ
ἄνθρωποί ἐστε;

⁵ Τί οὖν ἐστὶν Ἀπολλῶς; τί δέ ἐστιν
Παῦλος; διάκονοι δι' ὧν ἐπιστεύσατε,
καὶ ἐκάστῳ ὡς ὁ κύριος ἔδωκεν.

⁶ ἐγὼ ἐφύτευσα, Ἀπολλῶς ἐπότισεν,
ἀλλὰ ὁ θεὸς ἠΰξανεν·

⁷ ὥστε οὔτε ὁ φυτεύων ἐστίν τι οὔτε ὁ
ποτίζων ἀλλ' ὁ αὐξάνων θεός.

⁸ ὁ φυτεύων δὲ καὶ ὁ ποτίζων ἐν
εἰσιν, ἕκαστος δὲ τὸν ἴδιον μισθὸν
λήμψεται κατὰ τὸν ἴδιον κόπον·

⁹ θεοῦ γὰρ ἐσμεν συνεργοί, θεοῦ
γεώργιον, θεοῦ οἰκοδομή ἐστε.